

藤林普山とその子孫、門人録

森 納

藤林普山については、川田雪山の『日出新聞』に掲載された「蘭学者藤林普山」^(一)、景仰会の『蘭学の泰斗藤林普山先生伝』^(二)、山本四郎氏の「藤林普山伝研究」^(三)、『京都の医学史』^(四)などがある。

その家系についてはほとんどが、普山の郷里である京都府綴喜郡普賢寺村(田辺町)の南家の家系譜によっている。筆者はこの度、熊本県阿蘇郡南小国町の藤林家より得た資料をもとに、前記の田辺町藤林家にある家系譜を補遺して考察してみた。

一、普山の家系譜

京都、九州両藤林家に存在する家系図は全く同一のものでない。その初期の頃は、ほとんど同筆とみられ、内容に差がないものの信頼度は少ない。問題の普山(紀元)の前後より相違し、その後はそれぞれの子孫の手によって附記されている。山本氏の論文にみられる口上書(天保六年十二月)^(五)から推測される如く普山の自筆でない。なおこの口上書は、普山が京都藤林家別家を独立したため、普賢寺藤林家の後見人である南庄左衛門に宛てたものである。九州藤林家の家系図には、天保三年の伏見宮家の添書状と「普賢寺家藤林系図」の八字を染筆して下賜されたという。その染筆の文字状



写真1 藤林家系譜に下賜された証状

は幕末の戦火に焼失した。しかしその証状は藤林家に残されていた。

「今般其元家系譜 邦家親王御一覽之所先祖普賢寺殿第五世大西阿波守好吉元弘元年 後醍醐天皇笠置臨幸之時奉忠節之條御感心之至依之普賢寺藤林家系圖之題號八字御染筆被下候永傳後代可為普賢寺正統藤林氏之證者也

伏見宮諸太夫後藤越前守 藤原有紀 花押

天保三年辰五月 藤林泰介殿」

とあって、一応伏見宮家の御墨付をもらっている。このことは京都の藤林家を宮家から認知され、その後、普賢寺藤林家にも家系図一卷を与えて家名を立てたものであろう。

九州藤林家にある普山曾孫の藤林元胤もとむねの書いた『藤林余影』と、その家系譜を参照してみると、藤林家の始祖は、源頼朝と対立し反幕の公卿で有名な関白近衛藤原基通（一一六〇—一二三三）

で、晩年普賢寺に隠居した。その子の元通は従四位上朱智左中将とも普賢寺左中将とも言われ、この元通を藤林家の始祖としていて、普山紀元まで二十五代を数えている。元通の孫好長は普賢寺大西藏人左近將曹といい、この時に普賢寺より西方に居住したので大西の姓を名のつた。その子の大西阿波守好吉は普賢寺の地頭職であったが、元弘元年（一三三二）八月、後醍醐天皇が笠置山に移られるや、三十六名の同志と伴に従い、暦応元年（一三三〇）河内の石川の役で戦死した。その後数代南朝方に属して忠節を励んだという。基通より十六代敏元は大西備前守といい、足利義昭の近習物頭役であったが、天正元年（一五七三）義昭を自宅に供奉し、その十一月織田氏と戦い討死した。その子に三子があった。長子敏正は豊臣氏に仕えて普賢寺の水取村を支配した。慶長二十年（一六一五）五月大坂の役で戦死し、次男貞元がその代を継いだ。母方の藤林氏を名の

り、三男半兵衛重元は南氏を名のつたという。

二十四代成元は寛保三年（一七四三）に生まれているが、実は叔父の南平七元春の子で、幼名を伊之助、長じて荘右衛門といい、藤林家の養子に入つて作右衛門と名のつた。文化十二年（一八一五）に七十三歳で没した。南家と藤林家とは養子縁組が多い。その成元の妻は東河原村治兵衛（治平）の娘サトと言つた。その夫婦に二男四女があつた。

普山の兄弟姉妹

長男頭元は早逝した。

長女トメは西光寺皆応坊守とあり、後述する親類書により寺の住職に嫁いだものとみられる。（第2表参照）
二男紀元が普山である。普賢寺村藤林家家譜（南繁造氏所有）は前述の由縁もあり、普山についての記述はない。

普山の妹は三妹があり、次女の某は天神森の竹村次郎平妻となつた。三女照（のち町）は南庄左衛門（養子、久保清七二男）の妻となり南家を継いだ。

末女トメは普山三妹であるが、先の親類書にはその夫作右衛門の名が書かれていてトメの名はない。トメ（肇のち一馬）^{はじめ}は初め淳次（好文、江州信楽藩士某の二男ともいう）を迎えて別家藤林家を立てて、一男子（元文、万蔵のち淳道）を生んだが故あつて離別している。そして後夫に山城国久世郡寺田村（城陽市）の辻三郎左衛門三男元忠を迎え、藤林作右衛門と名のらせて藤林家を立てた。トメは学問がよく出来たのか、普山について医業を学び、女医として水取村で医業をした。家譜に「学医於兄紀元為医」と書かれていて、肇、一馬と名を改めたのは水取村で医業を創設するためのものであつたと思われ。

またトメは先夫淳次との子の万蔵を医師に育てて淳道と名のらせ水取村で医業をさ

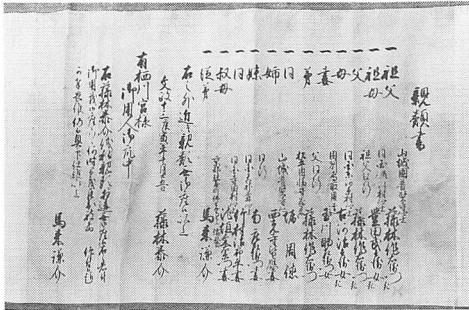


写真2 藤林泰介「親類書」

第 1 表 親 類 書

一祖父 山城國普賢寺郷士

藤林作右衛門 死

一同 同國天神森郷士

竹村治郎平妻

一祖母 同國飯岡村郷士

豊田武兵衛女 死

一叔母 同國寺田村郷士

池垣文右衛門妻

一父 祖父同断

藤林作右衛門 死

一從弟 京都麩屋町佛光寺下ル儒醫

馬来 謙介

一母 同國東河原村郷士

古河治兵衛女 死

右之外近き親類無御座候以上

文政十三庚寅年十月廿五日

有栖川宮様 藤林 泰介

御用人御衆中

一妻 因州鳥取用達 玉川助左衛門女

一弟 父同断

藤林作右衛門

右藤林泰介儀 私親類に相違無御座候 右之者ニ付

御用茂御座候はば何時ニ而茂罷出致為仰付候趣可奉畏

一同 松平因幡守家来

堀 周 徳

候 仍而奥印仕候以上 馬来 謙介

一姉 山城普賢寺郷

西光寺皆應妻

一妹 同断

南庄左衛門妻

せている。その淳道の子の順道も父に医業を学び、更に京都で修業した。そして淀藩士の娘いそと結婚して、淀(山城国久世郡、現京都市伏見区)にて医業をした。天保二年に水取村に帰って開業している。その子寛次郎も医師となっているが、水取村での医家としてはこの寛次郎で絶えている。

トメは文政六年(一八二二)四月に死去した。そのため作右衛門は、西光寺に嫁いでいた長姉のモトの子である乙枝を後添いとしている。

普山の略伝

二十五代紀元、普山は天明元年(二七八一)正月十六日、普賢寺水取村に生まれ、幼名を豊三郎、長じて政孝、または淳道といい、後に泰介(泰助)と改め、普山、筒城、玉川堂と号した。号はいずれも郷里の地名による。諱は紀元という。父、祖父、叔父ともよく学問をし、その地で寺小屋を開いていたようだ。普山が医師となったのは伯父南藤蔵の遺書によるという。そのため子供時代より勉学し、寛政八年(二七九六)京都に出て医業を学んだ。その頃江戸では蘭字が盛んであり、蘭方の医術が従前の中国由来の医術より優れているという話は既に京都に伝わっていた。普山は蘭方の医書も二、三見たがオランダ語を知らない者には全く理解できなかった。その頃偶然に稲村三伯の編さんした蘭和辞書「ハルマ和解^(八)」を手に入れることができた。「譯鍵凡例并に附語」に謄写とあり、購入して筆写したのか、他家より借りて筆写したのか明らかでないが、家庭的事情より後者であったとみられる。

そこでこの書を基に蘭語を徹底して勉強する気になり、郷里に帰り診療しながら勉学に励んだ。普山はその頃より伏見の小森桃塙や、江戸の宇田川玄真と文通しあい、質疑を交し蘭語の研鑽を積んでいたという。文化三年(一八〇六)春になって、稲村三伯が海上随鷗と名を改めて京都に来ていることを知り、早速京都に出た。その五月に随鷗の入門者となり、門人帳には小森桃塙と名を連ねている。^(九)

京都での住居は普賢寺の藤林家の記録では「寛政八年 京都」とあり、別記して「京都新町錦小路上ル」とある。文

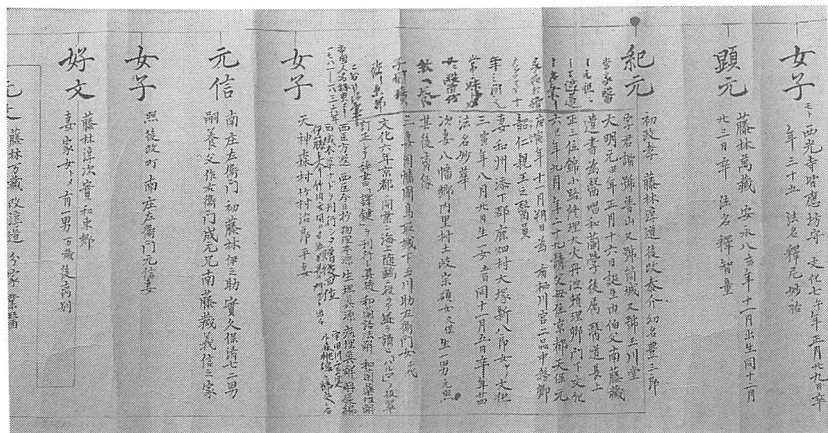


写真3 「藤林家系図」の普山（紀元）の項

化九年に室町四条北とあり、文政五年版の「平安人物誌」には蘭学家として、衣棚御池南となつてゐる。また文政十一年（一八二八）の『海内医林伝』^(一〇)には、衣棚竹屋町北とあつて、学塾は移転されたものとみられる。ただ後述するように文化八年正月に随鷗が死去してのち、その塾生を引き継いだ様子が門人録よりうかがえるが、問題の随鷗の塾の所在が明らかにされないないので、その家塾を引き継いだのか、その塾生を自らの塾に引き取ったのかは確認することはできない。推測するならば、巻一と巻二の門人録の塾生の関係からみて、文化四年当時、随鷗とは別に塾生を自宅に幾人かは持ち、随鷗不在の折には随鷗塾でその塾生を指導し、その没後はその塾を引き継いだとみるのが妥当のようである。文化十一年頃に家塾を再び移したことが推測されるが、このことについては後述する。

そして文化六年九月に郷里の藤林家に帰り、父母に分家独立することを願ひ出ている。普山兄の万蔵（頭元）は生後間もなく早逝しており、次男である普山が当然普賢寺藤林家を継がねばならなかつた。しかし普山が京都に出て医を専業とすることは普賢寺の藤林家を断絶することになる。そこに末妹トメの存在があつた。トメに医業をさせ、その後夫の作右衛門に藤林家の跡目を継がせることで了解が得られたのであろう。そして自分は京都に分家して独立することにしたのである。普山二十九歳の時で、いかに蘭学に執着していたかが判るのである。先の住居「新町錦小路上ル」はそ

の当時の自宅であったか、或いは随鷗塾であったかも知れない。文化七年二月師随鷗の『ハルマ和解』八万語を三万語に要約した蘭和辞書『譯鍵』を編さんし発刊している。『ハルマ和解』は初め、寛政八年に三十部しか出されておらず、その筆写に後学の者が苦労していること、訳語も補遺訂正する箇所も多いと、随鷗自らが譯鍵跋文に書いている。この譯鍵は簡便で、後に多くの蘭学者に利用されていた。

普山は文化九年十一月には小森桃塙の行った解屍に参加している。この年に完成されたと思われる『和蘭語法解』は文化十二年になって発刊された。文政五年（一八二二）に『和蘭薬性弁』を刊行し、文政十一年には『西医方選』を出すなど次々と著作がなされていた。普山の生活は必ずしも裕福でなく、経済的支援者もみられない。その中で著作を苦心して次々と発刊していた。それは小森桃塙のように臨床家でなく、蘭語研究に主体があつたためと思われる。文政五年に錦小路修理大夫丹波頼理に入門しているのも宮廷医との関係を求めてのことであつたと考えられる。

普山の江戸出府

『藤林余影』によると、時期は明らかにされていないが、普山は江戸に僑居した折「火災のために積年苦心せる所の著書尽く烏有に帰す 普山因りて嘆息して京師に帰り後ち擢用せられて有栖川宮の近習と為る」とある。この普山江戸下向には疑問視されているが、記録によれば、文政四年正月十日、芝田町より出火し品川宿焼亡、十八日芝新町より出火、大火となるなど、同年だけで江戸で九カ所の火災があつたとされる。後述の門人録をみても、入門者の少ない年は文化十二年と、文政四年であり、巻二は文政四年一名で絶えている。江戸に出て失火にあつたとすれば文政四年正月頃でなかつたかと推測される。

『近世名医伝』^(一三三)に「先是僑居江戸遭災。積年著書悉帰烏有。不樂者累月日。遂帰京師。入医官錦小路修理大夫門」とある。山本四郎氏はこの「近世名医伝」の文章を挙げて信じ難いとしている。普山が江戸に出たとする文献はこの他に、日出新聞の川田雪山の著述にもみられる。「普山は語法解出版の後、暫く江戸に僑居したることあり。其年代は明ならざ

れども(中略)、恐らく文化の未若くは文政の初にして普山三十七、八歳の時なるべし。(中略)然るに一日祝融氏の襲ふ所となり、積年心血をそそぐ所の著書大半烏有に帰したれば快々として楽しまざるの数日、遂に去て京都に帰れり」とある。

大槻如電の『新撰洋学年表』^(二四)には、その文化九年の項に「京都医人藤林泰助、普山、三三、前に蘭学逕を著す、欧文訓法を示す、及其語文脈を説き出す」として、その説明文中に「其明年に随鷗死す、普山乃(ち)江戸に出て宇榛斎に従遊せしならん」として、その時期を明らかにしていない。

普山の出府は推測の域を出ないにしても、藤林家に伝承として残されていること、「宇田川玄真、小森元良と往来交を締ぶ」とあることより、その出府の時期は玄真の生前であり、また別記の有栖川家への親類書の文政十三年の日付からみても、それより相当早い頃であつたとみなければならぬ。文化十一年三月には蘭学での親友でもあり、ライバルでもある小森桃塙が伏見より京都へ移住してきた。その翌十二年六月には普山の父成元が普賢寺で死去しており、十一月には『和蘭語法解』を刊行している。そしてこの年に、門人録などより塾を移転した形跡がみられるので、先ず文化十二年の出府は考えられない。

文政四年に江戸に出たとすると、先の『藤林余影』の「有栖川宮の近習となる」^(二四)(註、天保元年)は、その時期がかなり相違し、『近世名医伝』の錦小路家入門の前の時期に相当する。普山の文政三、四年の動行をみると、文政三年に越後の医家森田甫三、千庵父子との交遊がある^{(二五)(二六)}。五月六日には甫三宛の普山の書簡があり、越後の患者の治療に対する処方を書き、千庵の出府を促している。十一月二十一日には母サトが死去しており、この年の入門者は九名で前年の十八名に比べて少ない。塾生入門が必ずしも師の在在を意味するのではないが、その所在の有無によってその数は影響すると思われる。卷二には文政三年十一月に、勝田、大野、平井ら三名の入門者があり、平井は京都在住者である。文政四年二月に阿波の伊丹直江が入門しており、卷一には同四年五月に平安山崎玄東以下、六、七、八、九、十月に入門者があつ

た。その他この年の四月八日に森田千庵が入塾し、月日は不明であるが「尾張医士伊藤圭介」も入塾している。この年の入門者の数も少なく、記載の不備もみられる。九月二十一日に森田甫三宛書簡があり、十二月には小森桃塙らと京都で解剖を行っていた。その当時江戸には永年文通のあった宇田川玄真がおり、江戸での蘭学者との交流や、著作出版に出かけたものの著作の多くを失ったものとみられる。文政五年に刊行された『和蘭薬性弁』は、文政元年頃より起稿しており、当時は出版元にあつて火災を免れたものであろうか。それ以降しばらく著作、訳述書の出版は杜絶し、文政五年の序のある「西医方選」が文政十一年になつて版行された。普山の著述は後述するように数多いが、出版されたものは少ない。それはこの被災によるのかも知れない。

また天保元年（一八三〇）十一月一日、普山五十歳にして有栖川宮家医員になつたのも経済的理由であつたと思われる。この宮家医員になつたのは、自ら求めたものか、「擢用されて」職についたのかは明らかでないが、有栖川宮家に提出した文政十三年十月の「親類書」には、弟子であり親族でもある馬来謙介の保証書が添えられている（第一表）ので、自らの地位と家族の保証のためであつたと推測される。事実、後年になつて養子の普山守元も有栖川宮家に仕えた。天保元年、守元はまだ十五歳の若さであつた。

養子守元がまとめた『西医今日方』^{二七}の中に、普山の著作がまだ沢山残されていると書かれているので、その当時京都の屋敷にまだ発刊されていない著述、原稿があつたとみてよい。その著書については省略する。ただ著述されてはいるが、発刊されているか不明のものに『生理真源』『病理真源』『物理源本』『西域本草』『離合本源』『遠西度量考』『解屍篇』などがある。普山は天保七年正月十四日、五十六歳で没した。

普山の墓は京都市左京区黒谷の金戒光明寺の墓地内にあり、弘化四年丁未中秋、中務少輔丹波頼易の撰文による碑文が刻されている。また郷里普賢寺水取の墓地には天保七年の没年と親族名を書いた「釋入理」の藤林泰介塚と、昭和四年三月に贈位記念として建立された「贈正四位藤林普山先生之墓」がある。

普山の妻子と馬来謙介

普山の妻には三人がいた。最初の結婚は、京都から帰郷中の頃で、和泉国添下郡鹿畑村（奈良県生駒市）の大塚新八郎の娘でヤノといい、一女「五百」を生んだ。五百は長じて伊勢の四日市駅の伊達助左衛門二男良平を養子婿として迎え、藤林道紀と名のらせた。しかし紀道は文政七年に没し、五百もまた文化三年十一月二十四歳で死去している。

次の妻は八幡郷内里村（八幡市）の土岐宗碩の娘で、久保といい文化五年に結婚し一男子、元照を生んだが翌年元照は死去し、久保とは離別した。

三妻は因幡国鳥取の玉川助左衛門の娘千代である。助左衛門は「因州鳥取御用達役」とあるので、恐らく京都の因州藩屋敷に勤めていて、随鸕の仲介による縁談であったと思われる。

先の親類書（第一表）の弟、作右衛門は妹トメの婿であり、「弟、松平因幡守家来、堀周徳」は妻千代の弟であったとみられる。

保証人とされる馬来謙介は、親類書には従弟とあるが実は娘の婿であり、文政六年に普山門下に入塾した門下生である。即ち普山と千代の子タミ（民）の先夫である。タミは家譜には文化八年、京都に生まれたとあり、「民、儒医馬来謙介温妻、母玉川氏」とあるので、普山によつて長女のタミを謙介の嫁にしたものであろう。しかし何故か間もなく、謙介とタミは離婚しており、その原因は判らない。

註1 謙介の旧姓は不明だが、元備前岡山藩医馬来見益の養子に入り、備前藩医となっている。謙介の養子先の馬来家は出雲富田の尼子家の家臣で、尼子家没落の後、伯耆黒坂に移り医業をした。謙介五代前の見益の時に因州備前の国替え（寛永八年）があり、その折に備前岡山に来て、藩の医師になった。六代目見益の養子に謙介が入っている。「備作医人伝」には「見益に嗣子が無かつた故、浪人中の謙介を養子にした。謙介は京都で医業をしていた処、五口下され御召返しを仰付けられた。後に謙介に実子がないので信濃守御家中小高元仲の次男元迪を養子にした」とあるので、岡山に帰った謙介は仕官するとともにそこ

で再婚したものとみられる。この謙介の馬来家と、タミの後夫となった三谷泰作家は伯耆黒坂村に出自を持つが、その両者の関係は判らない。

普山と千代の間には、長女タミの下に四男三女が生まれているが、長男元通は「藤林太一郎、母同上、文化十一年甲戌年正月元日戌刻誕生于菊水鉾町」とあるだけで、経歴も没年も書かれていない。あとの三男子は生後間もなく死没している。女子は信（文化十三年生）、直（文政二年生）、澤（文政四年生）、男子は元好（鏡三郎、文政七年生）、元長（三郎、文政九年生）、元常（管之助、文政十二年生）となっており、最後の元常は普山四十八歳の子供である。三妻千代の生没年は不明であるが、若い妻であったのであろう。

三谷泰作 タミの後夫となり、藤林家に入った泰作の名はこの門人録にない。恐らく文政八年以降の入門とみられる。タミより四歳若い、その婚姻は天保初年であったと推測される。家譜に

「守元 有栖川宮家侍医、号霞城、妻家女民、伯耆日野郡江尾三谷家より養子、三谷泰作改守元」とある。晩年病身であった普山は後継者を門人の中から学問のよくできた泰作を若い（二十歳前であったか）ながら、タミと夫婦にして家を立てたものと思われる。

泰作は文化十二年（一八一五）、伯耆の江尾村に生まれた。若くして京都に出て学問に励んだ。普山の学塾に入り、普山の後継者となる。伯耆に因んで普山と号し、字を素処、諱を守元と行った。国学、蘭学に通じ、広瀬旭荘と親交があったという。普山没後の学塾を受け、また有栖川宮家に勤めた。その門人も多くあったといわれるが、資料は普山後年の門人録とともに禁門の変（文久三年七月）など幕末の戦乱で焼失したという。弘化四年（一八四七）三月、亡父の遺稿を整理して『西医今日方』を発刊している。泰作はその序文の中で普山の著作を更に整理し、出版することを意図していたと書いている。すなわち「其の余の著作及び翻譯する所の数十百部は未だ校定することを易からず。他日を俟つのみ」とある（原白文）。

しかし幕末の京都は再三火災にあつてゐる。安政元年（一八五四）四月や先の文久三年（二八六三）の大火もあり、藤林家も類焼していた（奈良、鹿畑村の姉宛、藤村民書状^{（一九）}）。この時の火災で普山の残した資料も、泰作の文書も焼失し、一家は大津、坂本町に移つて医業をした。この泰作には幾つかの話題があり、毀誉褒貶が多い。坪井信道の養子信良の嘉永二年（二八四九）の書簡に次の様に記されている。

「西医今日方已ニ刻成しよし

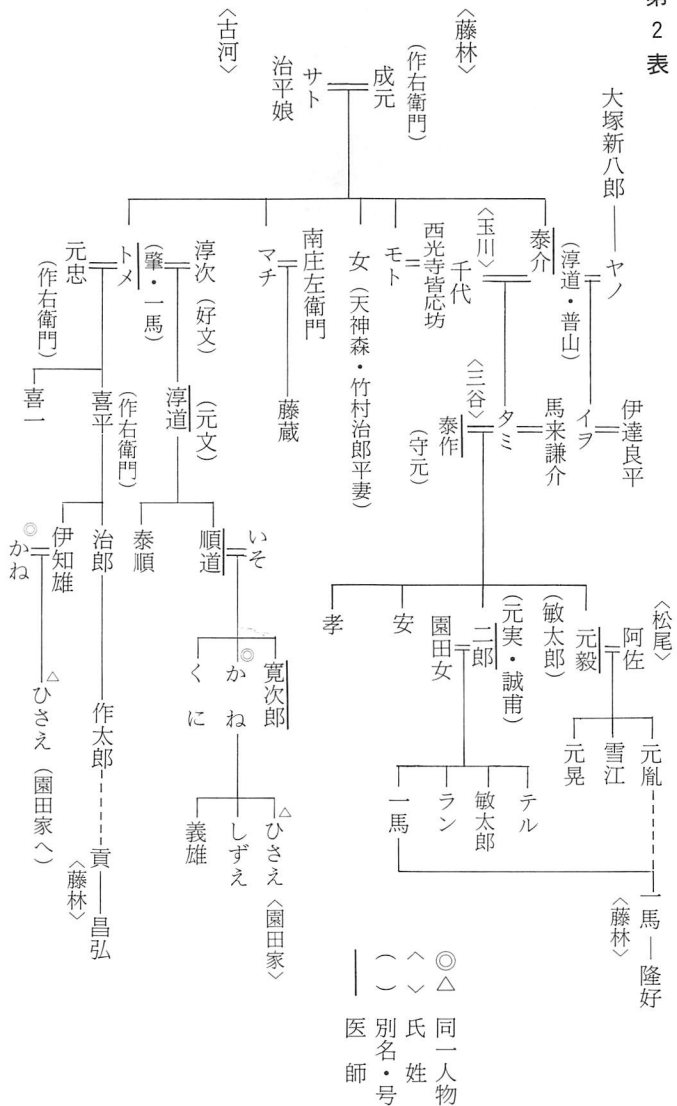
始^テ承^リ申候。尤モ都下社中之人之作ニアラス。定^テ藤林泰輔先生之遺稿ナルベシ。藤林家事先生物化後其子大不肖、大放蕩^{ニテ}家財転没、当時何国^ニ在ヤヲ不知。先年都下へ来り今日方トカ申者上木致シ度候故、社中一統より助力致吳杯トテ度々貪り来り申候。併シ格別之大放蕩家ニテ從來不義理之事モ多ク有シ故、誰モ不取合早々^ニ致置候事有之也。定メテ其今日方ナルベキカ。察スルニ要書ニハアル間數ト存申候。価之義ハ後日聞合可申上候。」

この書簡によれば、泰作は江戸に行き、『西医今日方』出版のため資金を求めたものとみられる。其子大不肖、大放蕩とあるので、江戸ではあまりよくない風評があつたものとみられる。泰作の若い頃は遊んでいた時期があつたのかも知れない。或いは其子は藤林太一郎（元道、タミの弟）のことであつたかも知れない。またこの書簡は当時の江戸と京都との学問の対比や、江戸三大蘭医家といわれた坪井家の家格、その養子信良のきまじめな性格も考えられる資料でもあろう。

泰作は大津に寓居すること数年、医術も盛んであつたとされるが、安政五年（一八五八）九月十二日、四十四歳で病没した。黒谷の普山墓の傍に埋葬された。碑誌は交遊の深かつた広瀬旭莊の撰になるが、その墓碑は永らく建てられていなかった。近年九州の藤林家によつて新しく建立されている。碑誌の中に「君審直不詭配亦賢徳」とあり、寡言実直でいつわらずとあり、先の信良の人物評と大分異つてゐる。人に迎合することが少なかつたものとみられる。碑誌の前文を掲げると、

「君諱守元字素處號耆山伯耆人姓三谷贅于京師醫藤林氏因冒其姓而繼其業安政戊午九月十二日病終于大津僑居年四十

第 2 表



◎ 同一人物
 △ 氏姓
 () 别名・号
 | 醫師

有四配藤林氏生男二人長曰敏女三人君睿直不詭配亦有賢德既葬敏以余舊交請誌其墓嗚呼君少于余八歲一朝至此乎 安政己未五月 廣謙撰」

泰作の子孫

泰作とタミとの間に二男三女があつた。長男は敏太郎といい、天保十二年（一八四二）京都西黒門通りの邸で生れた。敏太郎は名を元毅、字を士弘といひ晩翠堂、簡城、後に霞城山人と号した。幼くして大津に育ち、広瀬旭莊の門に入って学んだ。安政二年（一八五五）十五歳の時にその塾頭になつたとあるのでそれが正確であれば、旭莊が大坂に居た時期であつたとみられる。文久元年（一八六一）旭莊は豊後日田に帰り、同三年八月に没している。敏太郎はその後、京都に帰り医業を開いた。祖父の家業を恢復すべく努力したが、時は幕末の混乱した頃であり、苦難に耐えて診療した。門弟

も二、三人は常に居たと残された書簡にある。

敏太郎に弟と三妹がいた。弟の二郎は後に名を元実と改め、誠甫、存甫、子華と号し、若くして医術を学んだ。また儒を旭莊に学び医師となつた。そして父泰作と旭莊門下生として同門であつた園田謙吾（三）の仲介で、某女と結婚し、その園田氏が豊後森藩に儒官として仕官する折、同氏に従つて九州に行き、森藩主久留島氏の医官となつた。その時、京都の兵火で藤林家の諸資料を失うのを恐れ、敏太郎は二郎に門人帳二巻、家系譜、泰作の書簡などの文書を預けたのである。二妹は敏太郎が養育した。敏太郎の母のタミの死亡年月日は不明とあるが、文久三年頃は死亡していたようである。敏太郎が九州の二郎宛に出した書簡には文久三年七月十九日の禁門の変で、宮廷内に勤務中戦火が及び、砲火による傷病の手当にあたり、十二月には越前まで出張したとある。当時宮家の医師となり、時節柄外

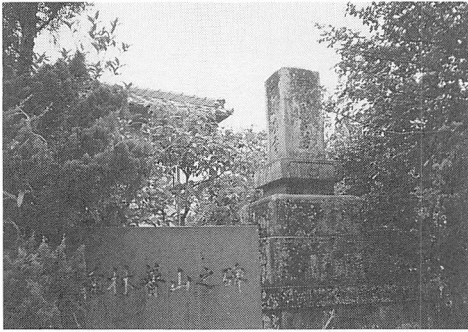


写真4 藤林普山之碑と藤林元実寿蔵碑
（大分県玖珠町大隈）

科手術も学んでいた。しかし自宅も兵火で焼失したため、先輩の石井良亭の死去後の石井邸を借家として開業した。当時敏太郎は、石井未亡人とその子息、家来一人、門生一人と生活していたとあるので、妹達は他家に預けてあったものと思われる。ただその後は数年来の病弱で床に臥すことが多いとも記されており、慶応三年（二八六七）二十七歳の折に、石井未亡人が播州赤穂へ帰郷した。借家の都合や物価高騰で生活も苦しく、宮家勤務のため勤王、佐幕派による災難にあうのを厭い、一時京都を去る決意をする。そして伯耆日野郡黒坂村の叔父三谷周助を頼って山陰に下り、黒坂で開業した。

この黒坂での開業は田舎のこととあって、診療は忙しいばかりで金銭のゆとりはなく、とても帰京して開業する準備はできなかった。そのうち黒坂のもと町奉行の家であったという松尾氏の娘阿佐を嫁として迎え、明治五年八月に長男元胤もとむねを生んでいる。

その後日野郡印賀村に移り、その所の医師上田三貞の跡を継ぎ上田姓を名乗っている。当時印賀村には鉄山があり、人口も多く経済的に豊かであったと思われる。その改姓の理由は明らかでないが、『藤林余影』によると「此頃先考は讃州某藩士と称し、菩提所氏名等も亦総て其の実を明されざりしが、是れ京師よりの浪人ならば必ず朝敵の一人なるべしとの嫌疑を避けたると宮家に憚る所ありたることに起因せるもの如く」とあるように、当時敏太郎は京都での宮家勤務で、朝敵の嫌疑を受けることを極端に避けたのであろう。幕末の京都での暗殺事件や、たまたま京都の本圀寺事件（三三二）を起した二十士が黒坂の泉龍寺に幽閉され、第二次長州征伐の折に脱走者が出た。これらの事と敏太郎の京都での交際者に勤王、佐幕に関係する者があって恐れたのかも知れない。

印賀村に行った理由に、随鷗門人の進藤玄徳（三三三）という先輩がいたためとも思われる。

弟の二郎への手紙には帰京の念願が厚いことを報じているが、敏太郎は印賀にあつて診療の傍ら寺小屋を開き、また儒学を講じたり、その地方の文人と交流し、詩酒の間に暮らしていたという。いずれ帰京するつもりであったのであろう

が、山陰の風土は経済的にも、人情的にもそれを容易に許さなかつた。

明治初年、印賀で種痘を行った時、「天降僊花、栽之于人、神医一出、四海皆春」の詩を残している。明治十六年一月十六日、二男元晃の生後三十日の祝宴に、往診を依頼され「医は司命者なり、私家の慶事を以つて他の苦悩を等閑視するに忍びず」と雪路を出かけ、数里、病家二、三軒を訪ね、途次雪中に倒れた。四十三歳の時であつた。墓は印賀一条山下にある。

敏太郎の子、元胤は新聞記者となり台北の台湾日々新報社に勤めた。

森藩に仕えた二郎(元実)は天保十五年五月の生れで、二十歳にして藩主久留島通靖の侍医となつた。慶応四年大隈村に在任して医業の傍ら塾生を指導した。明治三十六年多くの塾生によつて寿藏碑(二四)が立てられており、明治四十二年九月、六十六歳にて死去している。その明治十八年の種痘状が残されていた。元実は先妻と離婚しており、後妻を大隈村高橋氏の娘、松と再婚している。ただその子孫に医を継ぐものがいなかつた。

二、普山の門人録

(1) 門人録卷一

題言

やつがれ和蘭オランダの学を修る其初はじめて 西洋の医典二三策を求 贖あがなひ且かつ はるまの譯書二十五号を騰記し 常に山背やましろの旧郷にあつて 東に籃かごし西に藜あかきし療救につかるるの余り 蟹行かいこうを雪窓に尋ね 蚊脚ぶんきゃくを螢燈に検す 静に自計するに三千六百の烏兎恍うとわうとして夢裡むりに過ぐ 其間師事するは我泥丸宮中赤衣の人 友にするは僅に伏水の桃塢のみ 固陋の寒滄伝統かつて淵源なし 謬狄野靱素より杜撰ずせんなるを自知せり 必竟いろはの小児とa b cの大児と遊戯する 屑筌繩蹄の技倆すぎに過ず 何ぞ更に顔をあげて教導の任に安じ南面の達磨たらん 然はあれど誤認あやまりて來請きたりこふには 愚得せし

百一以て聊下問の篤志に酬ふ 是によつて巨鱈を釣り珍鱗を得るの手段を営ば唯其人の稟恵と誠篤とに有べきのみ
 文化四丁卯年春季春

藤林淳道 誌

四月

北越

尾崎 厚純

摂州奈取村

奈良 豹逸

越後柏崎在宮ノ窪村

大橋 菊庵

東都

鈴木 松石

讃州高松庄

河田 迺全

河州四番村

葛岡 栄二

摂州難波村

改正 淑民

因州鳥取

日比 柳三

因州用ヶ瀬村 有本 一幹

城州東畑村 大谷 要人

但州 堤 柴介 幹○

京 柳馬場 廣川 周平

京 中立壳 仲 環

同 麩屋町 長友 雅楽

因州 土肥 恕仙

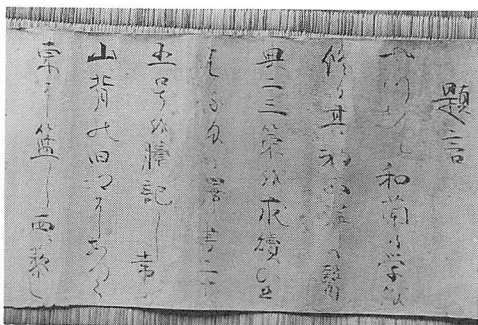


写真 5 門人録卷一の題言卷頭

備前岡山藩 佐治 玄圃

因州鳥取 内藤 純伯

讃州高松藩 宮武 純吾

同 塩田 龍眠

京新町 浅井莱太郎

因州鳥取 岡 元杏 諷○

同 春名 一碧方教○

奥州千台在 高橋 朴庵

若州小濱藩 小杉 玄民

作州津山藩 高畑 生起

京 高辻 福田熊二郎

(抹消 作州弓削 岡部 玄民)

文化八辛未五月

平安新町六角下 埜山 千杰

文化八未六月 加州金沢 山本太室以文○

招介^{マツ} 周防左門

文化八未六月 東肥蘇陽 古澤 元華○

招介 周防左門

奥州仙台 丘 快潤直行○

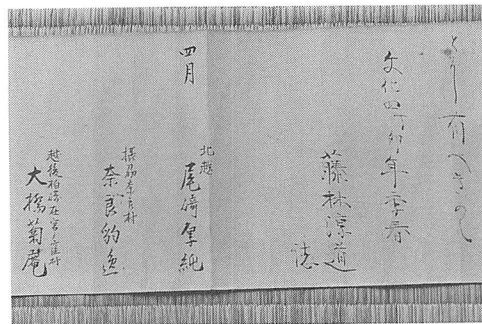


写真6 門人録卷一の題言末尾

招介 周防左門

文化辛未十一月 江州八幡 松井 雨杏

招介 中川修亭

文化壬三月 摂州大坂 橘 貞次 ○

文化九壬申三月 因州鳥取 村川 元輔 ○

招介 堤 桂樹

文化九壬申十月 但州一日市 川端 玄洞正 ○

招介 黒崎俊平

文化癸酉春二月 備前岡山 菅 栄軒 ○

備前岡山 久山 敬叔惟粹 ○

春三月 泉州佐野浦 平島 文乘

名世慶字有章

同夏六月 伊豫三島 児山 尚仙

冬十月 江戸北新堀 橋里禽洲

冬十一月 濃州栗笠 佐藤 拙庵

名源義字公種

文化甲戌二月 若州西津 米原 吉人

名永年名由古

夏五月 因州鳥府 伴 秀哲紀川 ○

同種八月 讚州高松藩医 石川 清安政○

紹介 宮武純平

同秋八月 讚州香川郡西庄村

本多 栄齋忠朝

紹介 宮武純平

文政三卯霜月七日 讚州丸龜 河田 貞吾

同日 京住人 舟谷伊兵衛

文政三、五月廿二日 豊後岡竹田

板井 成章

文政四、五月 平安 山崎 玄東章

同六月十二日 与陽大洲 村越 藤也

同七月廿三日 阿州徳島 江本泰順安○

文政四、八月 奥州二本松 安濟 三順義重

文政四辛巳十月 尾州名古屋 伊藤 舜民○

紹介 伊丹直江

文政五午正月六日 長州萩 長松 随友範○

文政五午正月十日 尾張篠城大章

西尾 含章○

文政五午正月 但馬竹田 堀 恭安温○

文政壬午閏正月 兵庫 藤田 佐五郎靖○

同年同月 西播赤城 中島 瑞軒

文政壬午四月六日 阿波撫養小桑島

天羽 玄藏真

同年同月 皇都 馬島 襄助美成○

同年七月廿二日 皇都 小川七兵衛吉勝○

同年八月十一日 皇都 吉川 良吉景教○

同年八月十二日 伊勢 越村 大輔德基○

同年八月十二日 伊勢山田 橋本 春溪元貞○

同年八月十五日 伊賀中村 澤野 傳兄正敏○

同年八月晦日 因州鳥取 尼子 香橘維則

同年初冬二十七日 信州松本藩

小林 圭碩為邦○

文政癸未正月二日丹後峯山 田中 三鼎光義○

同 正月 越後長岡藏王村 渡辺 文恭

同 正月 摂州広瀬村 佐々木敬元濟○

同 二月 作州弓削 岡部 玄民常泰○

文政六癸未年七月 土州高知 冲 辰次郎浩○

文政六癸未年冬十月 備中倉敷 馬来 謙介驅○

同	備中平田里	三木	用貞○
同	十月	備前浦田	三宅友次郎○
同		備中宮内	藤井雅樂介信○
	十一月	備前児島下村	高田 雲岫孚○
同		備中倉敷	花房 玄仙興冒○
同		備中黒崎	牧野 閑正正○
同		同国福嶋	江口 敬輔簡○
同		同国早嶋	蘆村 周祐隆○
同		同国生坂	小郷 大貳正○
同		備前岡山	三宅 昌健真○
同		備中妹尾	岸田 関平
同		備中倉敷人	福島 貞策
	文政七甲申年三月	伊勢津	草源 怨庵光○
	四月	洛東	吉田 衛守許高○
同	七月	備後	多田 立績○
同	八月朔日	三州加茂郡足助	
		山田	文中
同	二日	越中礪波郡答野島	
		中島與三太郎高庄○	

同 廿日 丹州八木 秋田 貢

廿四日 龜山藩 鶴見鉄之亟貞龍○

同 九月十一日 雲州杵築大社家中

鈴木 元亮広別

同 九月廿日 平安 中尾 猷三徽○

同 十一月五日 越前丸岡 竹内 玄同幹○

酉 二月五日 備中連鳥産 大熊 玄達

紹介 藤田尚謙

同 二月 能登七尾 安田 玄壮柔○

同 二月 松前箱館 田澤 長繡

三月四日 南部三戸 金田一省吾敏慎○

三月十八日 土佐高知 市川 周策敬勝

三月廿日 備中生坂 間野 軌慶○

四月廿六日 防州小郡 岡 順亭誼○

四月廿六日 雲州松江 加藤 玄澤直良○

五月廿五日 淡州仁井浦 高田 三立

十月五日 摂津兵庫 加藤 直幹貞

題言の解説

「はるまの譯書」。『波留麻和解』。寛政八年八月、稲村三伯が石井庄助、宇田川玄真、桂川甫周らの助力を得て完成させた我が国最初の蘭和辞書で、後年「江戸ハルマ」とも通称されている。

「山背」。山城。

「東藍、西黎」。薬箱を担ぎ、杖をつけて四方に往診する意。

「蟹行」。西洋文字、ここではオランダ語の意。

「蚊脚」。アルファベットの意。

「烏兔」。日月、三千六百の烏兔は約十年間。

「泥丸宮」。脳神、精根をいい、頭脳の意。

「赤衣」。罪人の着る衣。または五位以上の人を指す。泥丸宮中赤衣の人とは、鳥取藩を脱藩した稲村三伯（海上随鷗）を指すか。当時の普山の師として海上随鷗、友人として宇田川玄真（江戸）、小森桃塙（伏見）がいた。玄真とは文通の仲であつた。

「固陋の寒滄」。頑迷固陋な学問をしか知らない自らの浅学非才さを言つたものか。

「謬狄野靱」。西洋の学問の価値を知らない粗野な自分になどえた言葉か。

「屑釜繩蹄」。役に立たない魚貝や、獣とりの道具。

「南面の達摩」。南面は帝王、君子。達摩（磨）は立派な天竺の僧の意。

「巨鼈、珍鱗」。成功し、立派な業績を得るたとえ。

(2) 門人録 卷二

「医は濟世の鴻業。寿民の仁術にして、もろもろの徒芸徒技の比にあらず。其伝る必、實際を貴び、其成る必誠心に帰す。故に師となり弟子となる。固より俱に過を救ひ、足らざるを補ひ、言をはまず、腹非せず、善を掲げ、悪を匿し、長

短互に仮し 有無相通過て 口訣禁方妄に人に伝与せざるは支那の古教に拠り 他門多流敢て誹謗せざるは西洋の正規を守り 畢竟只斯業のなるを希ひ誠実終りあり 親情益 渥く以て交誼を変ぜざるに在る爾

瑤川堂主人誌

文化甲戌初秋

紹介 宮武純平

同七月朔日 京都 藤田 恭輔守○

同八月朔日 江州仁正寺 森島 玄瑞立則○

同十月朔日 京 猪熊 半井權之輔轍○

同十月朔日 京新町下立売角

河村 良節石住○

同十月朔日 新町一条下ル処

宮崎 典膳定行○

同十月朔日 讚州高松藩 石川 清安政○

同十月朔日 讚州香川郡西尾

本多 栄齋忠朝○

同十月朔日 京都 田中 正治之方

同十一月朔日 信州山吹 石神 行造政尹○

同十一月十一日 讚州高松藩 久保 久安方○

同十二月廿三日 京師 高木 鋤平確○

文化十二乙亥

十一月十七日 京師 佐々木弥三良君水

文化十三丙子

正月十七日 三河国藤川駅

穂井国靱負忠友

同二月朔日 京師麩屋町竹屋町下ル

平田 文輔貞介

同二月二日 京師間之街二条南軒

鈴木 元安

同三月十二日 東一条千本西へ入

西脇 元吾秀豊

同三月十六日 京一条千本西へ入

井上喜兵衛保教○

同三月廿四日 豫州大州 後藤 友圭○

同四月二日 越前福井 馬淵 玄龍○

同四月二日 越前福井 半井 玄貞緝○

同八月三日 豊後杵築侍医

松本 寛五四大○

同九月十八日 越中川崎 宮永 隼人危○

同九月十八日 京都 中邑中三郎善永○

同九月十八日 奥州白川 鳥居 左近俊明○

同十二月十二日 摂津大阪 塚田 文蔵正信○

文化十四丑

四月朔日 豊前中津 大原 信卿忠○

同四月七日 紀州田鶴濱 櫻井 龍元良○

同五月二日 豊前宇佐 寺井 憚吾信○

同五月二日 豊前中津 大江 元剛正○

同六月二十日 讃岐高松 本多 茂庵

同六月二十三日 同 千野 元達寧○

同六月二十三日 讃岐高松藩 山田 景純方○

同六月二十三日 同 松下 友賢

同六月二十三日 讃岐古高松 久保 堯造増光

同十一月十三日 油小路四条下ル東

坂 左珉恵持

同十一月十四日 播州姫路 高濱 俊葦

文化十五戌寅

正月十四日 江州彦根 数江 柳溪充○

同正月十六日 京兆 斎藤亀三郎忠直○

同正月十九日 越州府中 齋藤 脩伍利兼○

同二月十五日 豫州大州 曾根 周祐周甫○

同二月十七日 豊後杵築 辻 元利亨○

濃州大垣 飯田 通○

同三月十一日 同国同所在領家村

久世 樟蔵○

同四月五日 越中新川郡魚津

細川 元亀徴○

同四月十三日 伊豫大洲 菊原 玄策徳隣○

同四月十三日 加州大聖寺 大武 了玄有行○

文政元戌寅十月 京師 宇野 義平広生○

同十月八日 豊前中津 大江 貫恕範吉○

文政二歳四月 讚州丸亀 氏家 恕三宣胤○

同四月 阿州鳴門 山田 内蔵道○

同閏四月 近江大津 三嶋 健造安恭

同五月 日向飢肥 埜中 文一信直○

同五月 阿州徳島佐古町 陸 玄活硯

同六月 油小路四条上ル町

渡辺 貫蔵格○

同七月 芸州賀茂郡貞重村

名井 衆甫相久○

同七月 紀州日高郡南部

大野 松齋典

同八月 長州萩 日野 春庵文通○

同八月 長州萩 西村 玄貞瑛○

同八月 伊豫今治城下 柳瀬 丙一柄○

同八月 阿州城南 十河 道彌○

同九月 勢州桑名 鈴木淳之輔堅

同九月十六日 土州高智 刈谷 善慶

同 十六日 濃州高須 高木 太仲

同十一月二日 越後蒲原郡和納

伊藤司馬三良祐姓○

文政三年

九月十五日 播州姫路 小寺沢鱗輔射之○

同九月廿五日 阿州城南 上村 禮輔範常

同九月二十五日 堺町二条下処 江本主鈴興○

同九月廿八日 播州赤穂 稻岡 秋平

同十月廿三日 備前岡山 柴岡 宣全孝柔

同十一月十八日 豊後日出 勝田 元恪之徳○

同十一月廿三日 伊豫大州 大野 奇一重明○

同十一月廿五日 京 平井 海蔵達○

文政四年二月八日阿州城北 伊丹 直江重○

(卷一、二を通じて題言の振仮名は筆者の記。氏名の下のは花押、地名の扱は州、日付の全は同に統一した)

卷二の題言は、随鷗の社盟録、文化六年の題簽とほぼ同文であるが、二、三の字句に相違がみられる。このことは卷一の題言は文化四年の頃の、自らの塾生を持った普山の心意を示すものであり、卷二の題言は随鷗塾を引き継いだ時の、師の塾継承の意志の表れとみられる。

三、門人録の考察

普山門人録は二巻が残されていた。いずれも巻物にしてあつて、入門の年、月日、時に年月日が書かれ、出身地、姓名がある。人によつて花押のある者、稀に紹介者名の記されているものもある。文化八年以降は大体自署されていて、号、字、花押のあるものも多くみられる。

(1) 卷一について 題言部分是一部に破損があり、読みにくい部分もみられるが、普山の蘭学修業の経緯と塾生指導に当つての趣意が述べられている。

題言末に文化四年^{丁卯}季春とあるが、普山は文化三年五月に随鷗門人となつていたので、その翌年には自らの弟子を養成していたことになる。小森桃塙門人帳^(二九)にも享和二年(二八〇三)五月(桃塙二十一歳の時)に既に門人を入れていたので、各自が自宅で診療をするのに塾生を入れ、その指導をしていたとみられる。ただ普山は前述したように随鷗没(文化八年正月)後にその門下生を引き継いだ形となつていたので随鷗門人と重複する名が多い。そのためか題言の後は四月とだけ

あつて、同一人の筆になると推定される二十六名の氏名が列記されている。これは恐らく同時に書かれたものとみてよい。そして文化八年五月より門人の自筆による署名がなされていた。このことは門人録の題言あとの「四月」は文化八年四月のことと考えられる。

それ以前に普山個人の門下生がどの位いたかは、この資料では明らかでないが、恐らくその指導による自宅での塾生が何人かいたことは前述したように題言の年月、記名や小森桃塙の例によつても判断される。また一般に門人帳には多くの記載のない門人がいたのは通例であるので、随鷗の没後に門人録にない門人も引き継いだものと思われる。また普山自宅へ門人を受け入れたのか、随鷗塾をそのまま受け継いだのかについても明記されていない。

随鷗の娘さだと結婚した仲環（中天遊）の住所が中立売とある。仲環は貧困のため下僕のように随鷗塾で住み込み、働きながら勉学し、随鷗の死後、さだと結婚したといふので、^{二二}随鷗塾が中立売にあつてそれを引き継いだのか、或いは普山が随鷗塾を継いだために環夫婦が中立売へ出たとも考えられる。門人録の記載の状況からは後者とみるのがより妥当性があると思われるが、後勤を要する。恐らく随鷗門人たちの強い要望により、自宅とは別の随鷗塾を引き受けたものと想像され、それが文化八年正月と四月の間であつたのであろう。

文政三卯霜月の河田貞吾、同日、舟谷伊兵衛は順序からみて文政二年の誤記であらう。

(2) 卷二について 題言は随鷗の言であるが、弟子の心得として、実試主義を貴び、中国式の口訣禁方（口伝秘方）を排して、西洋学を学ぶ者の研鑽と交誼を説いている。「瑤川堂」は普山の号の玉川堂と同じ意であらう。この門人録巻二がなぜ巻一の中に位置して別記されている理由が明らかでない。文化甲戌（十一年）初秋とあり、瑤川堂という新しい塾名と、紹介宮武純平とあるので、恐らく元の随鷗塾とは別に新しい自らの診療所と塾を開設したものと推測される。巻一の文化十一年八月に讃岐の石川清安、本多栄斎が巻二には同年十月に入門とあるので、この二人は自分の都合で新しい塾に移つたものとみてよい。

第3表 年代別入門者数
() は文政3年3人の実数

卷 1			卷 2		
年代	西暦	人数	年代	西暦	人数
文化4年	1807	26			
8年	1811	5	文化11年	1814	11
9年	1812	3	12年	1815	1
10年	1813	6	13年	1816	13
11年	1814	4	14年	1817	11
文政2年	1819	(2)	15年	1818	10
文政3年	1820	3(1)	文政元年	1818	2
4年	1821	5	文政2年	1819	16
5年	1822	14	3年	1820	8
6年	1823	18	4年	1821	1
7年	1824	10			
8年	1825	10			
計		104	計		73

在していたと思われる。家伝によれば禁門の変(文久三年七月)、戊辰の役などに戦火にあい、また普山曾孫元胤の代にも台北の火災で多くの遺品を失ったという。禁門の変では門人録の巻物が池の水に浮んでいたと伝えられる。巻一の題言部分もその折の浸水のため字がうすくなり解説しにくい字もみられた。これらの戦禍によって第三巻以降の門人録その他の資料が喪失され、僅か二巻の門人録と少しの資料が戦乱の京都を避けて、九州の森藩の藤林家に預けられたものと考えられる。或いは先述したように普山孫の敏太郎が、暗殺、襲撃の対象となつて家絶する危険性を身感じていたのかも知れない。

巻一、二を通じてみると、巻一は文化四年季春の藤林淳道の記名に次いで、文政八年までの十九年間の署名録で、百五名(一名は重複していて実際は百四名)の名が記され、巻二はその途中の文化十一年から文政四年までの八年間七三名の名が書かれている。巻一、二の合計百七十七名であるが、巻一と二に重複して氏名のあるものが先述の二名いるので実際の門弟は百七十五名となる。普山は文政九年以降も開塾しており、天保七年(一八三六)の死去まで診療していたので、その後の約十年間の入門者がいたとみられる。また養子の泰作(守元)も、若いながら診療と塾を引き継ぎ、その入門者もあつたといわれるので(藤林余影)、三巻目或いは四巻目もあつたと推測される。恐らく文久年間(一八六一—一八六四)まで藤林塾は存

(3) 塾生について 随鷗門人から普山門下へと移った者は、尾崎厚純(季節)、奈良豹逸、大橋菊庵(采純)、鈴木松石(昌碩)、河田透全(右膳)、葛岡栄二(栄治)、改正淑民(佐五郎)、日比柳三、中環(耕助)、長友雅楽(雅楽之助)、土肥恕仙、佐治玄圃、内藤純伯(純中)、宮武純吾(顕哉)、岡元杏(元恭)、春菜一碧、小杉玄民、高畑生起(高畑)、塩田龍眠(良眠)の十九名がいる。(一)内は随鷗門人帳にある名である。

文化三年に随鷗が、江戸近辺で開いていた学塾を引きはらって京都に来た折に門人を連れてきたといわれており、文化三年三月の江戸の大火などの関係もあつて、京都に行く随鷗に従った弟子も多かつたとみられる。^(二七)文化二年の随鷗門下生で、京都の普山に学んでいる者に、大橋、尾崎、鈴木、小杉の四名がみられる。江戸から京都に来たものであろう。巻一の題言末の文化四年から自宅での塾生をもち、また随鷗塾の門下生も指導していたことは先の門人録の名簿の初めが文化八年四月と推定されることからも判断される。近年になって、随鷗の大坂在任期間を「少くとも文化三年八月から文化六年十一月まで大坂に居住した」という説^(二八)が出されている。このことについて普山門人録より検討するならば、先の題言に次ぐ「四月」が文化四年でないこと、また随鷗が文化四年前後より京都を引きはらって大坂に移住したことを示すものでないことは、随鷗門人帳との間に同四年、同五年、同六年、同七年にわたって門人の一部が重複しているので証明される。すなわち塾生が、同じ京都地内に随鷗、普山の塾があつても、それらがその双方に通つていたとは思えない。勿論一、二の例外はあろう。しかし随鷗の大坂塾と普山の京都塾に兼ねて入門しているとは考え難い。随鷗自らが京都と大坂で塾生を指導していたことを示している。^(二九)そして随鷗留守中の京都の塾生指導を普山が中心となつて行われていたと思われ、それが文化八年までの姓名として「四月」の頃に連記されたものであろう。

随鷗没年の文化八年以降に、随鷗門下生で普山塾へ再入門した者に、文化十一年に半井権之助、文化十三年に松本寛五、文政二年に舟谷伊兵衛、文政三年に小寺沢鱗輔らの名がある。このうちの松本、小寺沢は随鷗位牌裏面に名があるので、文化八年当時は随鷗に従つていたものであろう。また随鷗門人であり普山塾に門人を紹介した者に、中川修亭、

第4表 小森桃塙門人帳の入門者数との対比

() は普山門人録入門者数

年代	人数	年代	人数	年代	人数	年代	人数
享和2	1	文政元	1(2)	文政13	13	天保14	6
文化4	1(26)	2	23(18)	天保2	8	15	1
6	1	3	17(9)	3	11	弘化2	5
7	1	4	20(6)	4	7	嘉永2	10
8	1(5)	5	13(14)	5	6	安政2	3
9	3(3)	6	18(18)	7	4	3	2
10	5(6)	7	8(10)	8	8	4	2
11	7(15)	8	11(10)	9	10	万延1	1
12	7(1)	9	13	10	13		
13	26(13)	10	11	11	9	計	393
14	23(11)	11	10	12	12		
15	2(10)	12	11	13	9		

京都の人々にとって伏見の桃塙に対する認識は少なかったとみられる。文化九年になって解剖を行い、同十一年に伏見から京都に移った。それは自らの勉学と、蘭学での中央進出を計ったものである。これらの業績は桃塙の入門者数に影響して現われている。桃塙の京都での人気が急速に上ったのは文化九、十年以降であったとみられる。

巻一、二の門人録を通じて、文化四年から文政八年までの間、文化十二年以外は年平均数人から十数人の入門者があ

周防左門の名があった。

文化十一年の三月に友人の小森桃塙が京都(間之町御池か)へ出ている。そのためか翌十二年の普山塾入門は一人となっていた。この桃塙の京都進出に刺戟されて新しい塾を開いたのかも知れない。

桃塙のもとに随鷗門人が移った者がいたかどうかは、この資料では認められない。恐らくいなかったのではないかとと思われる。その理由の一つに、当時小森家は伏見にあつたこと、一つには蘭学者としての桃塙の名が、「訳鍵」を出版したばかりの普山に対して、京都での知名度が、文化八年当時では低かったためとみられる。

註2 桃塙は天明二年(一七八二)に美濃外淵(大垣市)に生まれ、九歳の時に京都伏見の医師小森義晴の養子に入った。義父義晴も美濃の人である。寛政七年(一七九五)、十四歳の時帰国して江馬春齡に学び、文化三年に随鷗の門に入った。そして文化六年に伏見で開業している。随鷗が死去した頃は

第5表 門人の出身地（小森桃塲塾は文化4～文政8年）

出身地	卷1	卷2	計	小森塾	出身地	卷1	卷2	計	小森塾	出身地	卷1	卷2	計	小森塾
奥州	5	1	6	7	伊賀	1		1	2	備前	6	1	7	
北関東				2	紀伊		2	2	3	備中	12		12	
江戸	2		2	1	和泉	1		1	2	備後	1		1	
越後	3	1	4	1	河内	1		1		備出	2		2	12
越中	1	2	3	7	山城	1		1	9	隱岐				1
越前	1	3	4	15	京都	13	18	31	32	石見				2
加賀	2	1	3	6	丹波	3		3	7	安芸		1	1	4
若狭	2		2	1	但馬	3		3	1	防長	2	2	4	2
信濃	1	1	2	2	摂津	6	1	7	3	讃岐	6	9	15	5
三河	1	1	2	5	淡路	1		1		伊豫	2	5	7	2
美濃	1	3	4	4	播磨	1	3	4	6	阿波	2	5	7	5
尾張	2		2		因幡	9		9		土佐	2	1	3	2
近江	1	3	4	10	美作	2		2	1	九州	2	8	10	13
伊勢	3	1	4	7	伯耆	2		2	6	計	104	73	177	188

るが、文化十二年の一人だけの理由は桃塲の開塾ばかりでなく家庭的な事情もあつたことは前述した。卷二の文政四年の項にも一人とあり、以降杜絶したままとつてゐる。これは普山の江戸出府によるためであつたかも知れない。

同時期の普山と桃塲と門人録の入門者数を対比してみると、普山門人録には年平均九・三人の入門者であるのに対し、桃塲門では文化四年より文政八年までの入門者は一八八名であり、年平均九・八人と大差がない。文化十三年より桃塲門が急増しているのは、その解剖と蘭方治療に人気が集まつたためとみられる。そこに普山が蘭語学主体の蘭方塾であつた差異が認められるものの、この二人の合計門人数は文化末より文政初期の京都に於ける蘭学の隆盛をしのばせるものがある。

また桃塲は宮廷との関係も深く、公家たちの診療にも當つていたとされ、文政三年二月には従六位下に叙せられ、肥後介に任ぜられて医師としての知名度は高くなつてゐた。普山は文政五年に丹波頼易の門に入り宮廷に近づき、天保元年（一八三〇）になつて有栖川宮家の医員となつた。このことは普山・桃塲は蘭学者として盟友でもあつたが、反面ライバル意識が

なかつたとは言えない。

門人の出身地を文政八年までの両者の塾生を京都で対比すると、三十一名、三十二名と大差がないが、山城に九名と桃塙塾に多い。伏見との関係もあるが、京都近辺のため明言することはできない。普山塾には山陽地方と四国に多く、ことに讃岐に十五名と多いのに気付く。因幡九名は師の随鷗や、その妻千代との関係によるものと思われる。これに桃塙塾は越中七名、越前五名、能登五名、伯耆六名、出雲十二名とあつて越後、因幡を除く山陰側に多い。また備前、備中、備後になく、讃岐も五名と普山塾より少ない。その門人達に係累や、人の繋りによる入門の傾向はどの家塾でもみられたものである。桃塙塾にもその後には備中などからの入門者もある。普山塾に文政八年二月、松前箱館 田沢長繡の入門者があり、両塾ともに奥羽地方から九州までの各地から入門者が集まっている。各藩の京屋敷を中心とした人の交流が、江戸と同じようにあつたとみられる。

文政四年の桃塙の解剖には普山門下より、普山、伊藤舜民、森田千庵らが立合い、見学した。普山門人録と桃塙門人帳との間に十一名の重複がみられる。日付よりみて、先に小森門下生となり、その後には藤林門下生へと移つたものが七人いるのに対し、藤林門下生から小森門下へ移つたものが三人おり、同月に両家塾に入門しているのが一人いた。この事について速断するのは避けたいが、そこに塾生の学問的指向もあつたと推測される。普山門人録の巻二に、随鷗の言を取上げて西洋学を修行する者同志の勉学協調と、切磋琢磨を述べているのも恐らく学塾での門弟同志の張合い、競合もあつたのであろう。

普山の後継者となつた三谷泰作はこの門人録には認められないが、泰作は伯耆、日野郡江尾村の人であり、馬来家と関係あつたかどうか判らないが、文政八年以降に入門したと考えられる。普山の死亡する天保七年まで、塾がそのまま経営されていたとすると約二百五十人近くの門下生がいたと推定される。塾生の在塾期間を一年半から二年平均とすると、常に十数人、時に二十人近くの塾生がいたことになる。これに対し小森塾は文化末期より文政中頃まではやや規模が大

きく二十数人の塾生が常に居たと思われる。

しかし藤林、小森両とも子孫に恵まれず、普山の養子泰作、孫の時代に京都を去っている。桃塙の実子義真は二十二歳で没し、孫養子の義比は放蕩して直系は絶えた。両家とも幕末維新による京都の混乱の中で、被害を受けて衰退していったのである。

註3 藤林隆好家に所蔵されている普山関係資料は次の通りである。

- 1、藤林家系譜 一卷
 - 2、普山門人録 二巻
 - 3、文政十三年十月廿五日付 親類書 一枚
 - 4、有栖川宮御印鑑札 一通
 - 5、伏見宮諸大夫後藤越前守有紀の記名による「藤林家系図」の証状 一枚
 - 6、藤林たみ書状（大和鹿之畑村車屋清七室宛） 一通
 - 7、広瀬謙吉（旭荘）書状（藤林泰作宛） 一通
 - 8、広瀬謙吉封筒、藤林泰作宛 三、藤林存甫宛 一
 - 9、藤林守元和歌一首色紙 一枚
 - 10、藤林普山墓碑誌文写 一軸
 - 11、藤林守元墓碑誌文写 一軸
 - 12、藤林敏太郎家族年記 一枚
 - 13、藤林誠甫種痘医免状 一通
 - 14、藤林元胤編著「藤林余影」、台北台湾日報社、明治三十八年二月一九日
 - 15、藤林隆好著「先祖を尋ねて」（藤林余影の抜粋）、昭和六二年
- 九州、森藩儒医の園田家資料は大分県玖珠町の園田元生家、久留島記念館に存在する。

稿を終る当り、熊本県阿蘇郡南小国町の藤林隆好氏、西原稔氏、京都府綴喜郡田辺町の藤林貢氏、西川滋氏、京都市左京区黒谷町の金戒光明寺様、大分県玖珠郡玖珠町久留島記念館の轟義禮氏、日本医史学会の片桐一男氏及び長門谷洋治氏その他の方々の御協力を得た。また門人録解読に鳥取県立図書館次長の安藤文雄氏の御助言をいただいた。厚く感謝申しあげる。

参考文献

- (一) 川田雪山「蘭学者藤林普山」『日出新聞』、京都、大正三年八月三十一日、九月七日。
- (二) 景仰会『蘭学の泰斗藤林普山先生伝』、京都、昭和三十三年。内容は山本四郎氏の執筆による。
- (三) 山本四郎「藤林普山伝研究」『日本洋学史の研究』、III、一八七〜二二三頁、創元社、大阪、昭和四九年。
- (四) 京都府医師会『京都の医学史』六九一〜七〇三頁、思文閣、京都、昭和五十五年。
- (五) 山本四郎『藤林普山伝研究』、前掲一八九頁。
- (六) 藤林元胤「藤林余影」、『明治三八年二月十九日、台北台湾日日新報社にて』の日付と記名がある小冊子で、後半の一部が損失している。藤林家の家系を家系譜と残簡によって整理してある。藤林隆好氏蔵。
- (七) 山本四郎「藤林普山伝研究」、前掲一九〇頁及び写真。
- (八) ハルマ和解。鳥取藩医の稲村三伯（のち随鷗、一七五八—一八一）が、江戸で寛政八年（一七九六）に完成した我が国初めての蘭和辞書で、石井庄助、宇田川玄真、桂川甫周、岡田甫説らの協力を得てFrancis Halmaの蘭仏辞書を訳解したものである。当初は八万語からなり「東西韻会」十三巻であったといわれ、後に「波留麻和解」と呼ばれ、更に「ゾーフ・ハルマ」（長崎ハルマ）に対し「江戸ハルマ」と通称された。
- (九) 杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』IV、七四三頁、早稲田大学出版部、東京、昭和五十六年。
- (一〇) 山本善太『海内医林伝』（本朝方今医林伝）、文政十一年刊、『京都の医学史』前掲より引用。
- (一一) 柴竹屏山『本朝医人伝』、一五八頁、嵩山堂、東京、明治四十二年。本著にも「藤林余影」と同文が記されている。発刊年より「藤林余影」が原典であったとみられる。

- (一) 榎藤成卿『日本震災凶謹攷』、三二七頁、有明書房、東京、昭和五九年。
- (二) 松尾耕三『近世名医伝』、明治十九年（蘭学者伝記資料）、青史社、昭和五十五年、所収。
- (三) 大槻如電『新撰洋学年表』、一一五頁、昭和二年。「天保元年十一月、藤林泰助五〇、有栖川宮侍医に挙げらる」とあり、藤林家系譜にも「天保元庚寅年十一月朔日為有栖川宮二品中将御詔仁親王之医員」とある。
- (四) 蒲原宏「尺牘よりみた藤林普山と森田甫三、千庵父子」『医譚』復刊第一号、一五頁、昭和三十一年。
- (五) 片桐一男「蘭医森田千庵伝研究」『法政史学』第一四号、五三頁、法政大学史学会、昭和三十六年。
- (六) 藤林普山『西医今日方』。養子守元の編さんになるもので、文政十一年以前に完成していたといわれている（山本四郎「藤林普山伝研究」）。丹波頼易の叙文（嘉永元年五月）、緒方洪庵の序文（弘化四年十二月）、藤林守元の序文（弘化四年三月）、山崎玄東の小引（弘化四年三月）、坪井信良の書簡などよりみて、弘化四年刊の説もあるが、それより遅く、嘉永元年五月以降、翌二年初めの刊行と思われる。
- (七) 岡山県医師会『備作医人伝』、四四頁、岡山、昭和三十四年。
- (八) 藤林たみ書状、年号不明、六月朔日付、くるま屋御姉様（大和、添下郡鹿之畑村車屋清七妻）宛となっている。藤林隆好氏蔵。
- (九) 宮地正人編『幕末維新風雲通信』、東京大学出版会、東京、昭和五三年。坪井信良書簡集である。
- (一〇) 園田謙吾（一八三四—一八九〇）。豊後森藩の儒医で、鷹城と号す。父も同藩士で園田茂三郎という。兄の園田鷹巢は藩の儒者であり、政治に関与して幕末の藩政に功があった。謙吾は十四歳で広瀬淡窓の門に入り、肥前、京都で医術を学んで帰り藩医となった。維新後は奈良、滋賀県の中学校長となっている。
- (一一) 本圀寺事件。文久三年八月十七日夜、鳥取藩主池田慶徳の尊攘の行動が御側用人たちによって阻碍されているとして、急進派の藩士二名は、重臣たちが宿泊している本圀寺を襲い、その四名を殺害した。
- (一二) 進藤玄徳。随鷗門人帳に「文化二年、伯州日野郡卯賀 進藤玄徳政照」とあり、卯賀は印賀の誤りであり、進藤も近藤の誤りでないかと思われる。
- (一三) 藤林誠甫墓碑。大分県玖珠郡玖珠町大隈、藤林毅家の横にある。生前顕彰碑として建立されたものであるが、後に墓碑

としている。その碑文に「性藤林名誠甫後元實幼時子葉後城山号 和蘭医著述之泰斗藤原出祖父藤林普山之孫 父鷹山二男 京都普賢卿御主也 藤林家世有栖川宮典医並漢字開 関西四国九州子弟養成医学普及盡力 久留島公請依大隈郷医及塾数多子弟養成門人健之(明治四十二年九月廿五日没、六十六歳) 明治三十六年佳日」とある。()は後年の付記であろう。

(二五) 杉本つとむ「江戸時代蘭語学の成立とその展開」、前掲七四七頁。

(二六) 拙稿「随鷗の蘭学塾と解剖」、鳥取県医師会報、平成三年十二月号に発表予定。中山沃氏は「蘭学を学んだ岡山の医師群像」―海上随鷗の門人―『洋学資料による日本文化史の研究Ⅱ』、岡山、平成元年、の中で、随鷗の大阪塾の期間を再考し、「少くとも文化三年八月から文化六年十一月まで」随鷗が大阪に居住したと推定している。これに対し、筆者は随鷗の大阪塾は香川景樹の場と同様に不定期で定住していない診療と塾生の指導であったと論じている。

(二七) 野崎藤橋「送随鷗海上君西遊序」『因伯杏林碑誌集釈』、一一七頁、森 納、安藤文雄共著 鳥取、昭和五十八年。「弟子の随ふ者、踵街に接す。野子も亦将に郊に出て餞せんとす」とある。その詩文中に「方今回祿を為して九陌一炬に委ねらる」とあって、文化三年江戸の芝、田町より出火して大火となっていて、鳥取藩邸なども類焼した。ただし随鷗が江戸市中で火災にあつたかは、この詩文だけでは明らかでない。

(二八) 前掲資料(三)、(四)。拙著『因伯の医師たち』三〇七頁、鳥取、昭和五十四年。拙著『因伯医史雑話』三九頁、鳥取、昭和六十年。

(二九) 小森桃鳩門人録は山本四郎氏の報告(『蘭学資料研究会研究報告』二四五号、昭和四十六年)及び(『小森桃鳩伝研究』『日本洋学史の研究Ⅱ』、創元社、昭和四十七年)にある。ただ後者に示された統計に困難があるので前掲資料『京都の医学史』の門人録に依った。

(鳥取県・森医院)

Fuzan Fujibayashi's Descendants and the Membership List of His Private School

by Osamu MORI

The Dutch scholar Fuzan Fujibayashi's descendants are the well-known Mitsugu Fujibayashi (of Tanabe-machi, Tsuzuki-gun, Kyoto) and his family. Recently I have discovered Takayoshi Fujibayashi (of Minamioguni-machi, Aso-gun, Kumamoto) and his family line.

Takayoshi Fujibayashi has Fuzan's genealogical tree and a two volume membership list of Fuzan's private school. The first volume was written by 104 students (1807-1825). The second volume was written by 73 students (1814-1821). Takayoshi Fujibayashi says that after 1825, the membership list was lost in the "Kinmon no Hen" incident in 1863.

Toou Komori was Fuzan's friend. In comparing the membership list of Fuzan's private school with that of Toou Komori we see that the two lists have a few differences. I think that Fuzan was good at the Dutch language, but Toou was skillful in clinical medicine and anatomy.